最後に問う！何度でも！何度でも！何度でも、問う！
なぜ、命は、尊いのですか？
なぜ、人間の命だけが、尊いのですか？
なぜ、人間は、罪なき、弱い生き物たちの尊い命を
身勝手に、理不尽に、残虐に、無益に、無慈悲に
奪っても、許されるのですか？

この美しい青い星から、1秒でも早く、全てのマモノが、いなくなり、動物たちと人間たちが、共に、平和で、幸せに、暮せますように！！！

2011年12月26日

小泉毅

これは、謄本である。03

〈1974年4月5日〉

1974年4月5日(金)のことは今でも、昨日のように、鮮明に覚えています。あれは、妹が、チロちゃんの散歩の途中で、1人、泣きながら帰って来ました。理由を聞くと、妹は、"チロちゃんが、犬捕りに捕られた!"と、言いました。私とオヤジは直に、柳井の保健所へチロちゃんを迎えに行きました。保健所には女の事務員がいて、女の事務員はにこやかな顔で"柳井で捕まえた犬は岩国へ連れて行くので、ここには、いません。捕まえた犬は、1週間は殺さないので安心してください。今日は金曜日なので、月曜日に岩国の保健所へ電話をしてから、犬を迎えに行ってください。"と言いました。私は月曜日から学校があったので、チロちゃんを迎えに行けなかったのですがたぶんオヤジが、1人で月曜日に岩国へ迎えに行ったと思います。しかし、チロちゃんは既に殺されていました。私は、この事を聞いた瞬間から実は、記憶がありません。次の記憶は暗い部屋の中で、1人で泣いている記憶です。そして、また、記憶が途切れ、次の記憶は、夜、チロちゃんの寝床であった、ダンボール箱の中から、チロちゃんの毛を拾い集めながら、そして、"絶対に許さない!絶対に仕返しする!"と心の中で叫びながら、拾い集めた毛を、ズボンのポケットの中にしまった記憶です!あの時の"怒り、悲しみ、憎しみ、殺意"は、今でも鮮明に覚えています。そして、あの時の"怒り、憎しみ、殺意"が、核となり、今では、私の心のヒダの中に、無数の"怒り、憎しみ、殺意"が、刻み込まれています。もう、この"怒り、憎しみ、殺意"は、私が、死んで、屍が、朽ち果てようとも、私の霊魂から、消えることは、ありません!

因に、1974年4月5日は、何曜日なのか、検討する前に、ネットで調べました。そうしたら、やはり、金曜日でした。だから、この記憶が、私の夢や妄想でないことが、わかります。また、柳井で、捕まえられた犬が、岩国で殺されるということを、どうしたら、妄想できるのでしょうか?!"柳井で捕まえられた犬は、岩国で殺される!"という事実を、知っているからこそ、語ることのできる話です!しかも、この事実は、一般には、公表されていないので、保健所に、聞かなければ、絶対にわからないはずです!そして、私は、中学生の頃から、この事実を、知っていました!つまり、1974年4月5日に、起きたことは、私の妄想や夢ではなく、紛れもない、現実に、起きた事実なのです!但し、オヤジや、おばあさん、この事件のことを、全く、覚えていませんでした。そもそも、チロちゃんのこと、自体、ほとんど、覚えていません!私は、そのことが、非常に、残念でなりません!しかし、本人、妹にとっても、この事件は、大変なショックだったらしく、当時、つとに、検察の調書に、証言しています。従って、この事件は、妹の証言からも、事実であることは、明白

〈チロちゃん〉(1/2)

チロちゃんは、1年弱(73年5月5日～74年4月5日)という、短かい間ではありましたが、私の大切な家族でいてくれました。チロちゃんは、オヤジが知人からもらってきたか、野良犬を拾ってきたのだと、私はずっと、思っていましたが、妹の調書によれば、妹が、拾ってきたと言っているので、そうかもしれません。

私の実家は、当時、一軒家を店(お菓子、パン、アイス、だもの等を販売)と自宅に分けて使っていました。チロちゃんは、店と自宅の間の細い通路に重いイスを置き、そのイスにつないで飼っていました。チロちゃんの寝床は、ダンボール箱の中に、新聞紙やボロ切れ(古着、古タオル)を入れたものでした。名前は、真白い犬だったので、最初は、たぶん、"シロ"と呼んでいましたが、途中から、"チロ"の方がかわいいという理由で、"チロ"と呼ぶようになったと思います。

チロちゃんは、オス犬です。チロちゃんは、大変、賢く、すぐに、"おて"、"おかわり"、"ふせ"を覚え、そして、よく、笑う犬でした。チロちゃんは、近所の犬に対しては、たまに、吠えることもあったかもしれませんが、人に対しては、誰にでも愛想が良かったので、絶対に、吠えることはありませんでした。オヤジも、チロちゃんが、生きていたころ、私に、よく、"チロは、人に吠えないし、賢い犬だ"と言って、ほめていたことを、覚えています。

チロちゃんの散歩は、基本的には、妹とおふくろがしていました。私は、チロちゃんと遊ぶために、チロちゃんを散歩に連れて行っていました。家の近所には、空地があり、そこで、私とチロちゃんは、ボールを使って、遊んでいました。最初は、いつも、私が、投げたボールを、チロちゃんは、素直に、持ってくるのですが、2人とも、段々と、相手にボールを渡さなくなり、最後は、いつも、チロちゃんが、ボールを口にくわえて、遠くへ、逃げて行って、鬼ごっこ状態になりました。これが、大変、おもしろかった、楽しかったです。だから、家で、チロちゃんに、ボールを見せると、また、ボール遊びができると思い、何度も、とび回られて、大変、喜んでいました。

〈チロちゃん〉(3)

夜遅く店を閉めると、チロちゃんを放していました。チロちゃんは、放たれると大変喜び、店中を駆け回っていました。私も、時々、チロちゃんを追いかけるように遊んでいました。そして、私が、チロちゃんに隠れて、ネコの声まねをすると、チロちゃんは、"何んだ！何んだ！"という顔で、私を探し、私が、何かを隠しているような素振りを見せると、"隠しているものを見せてよ！"というように、私に、とびかかってきて、これも、楽しかったです。

チロちゃんの鼻は、肌色(ベージュ)だったので、私は、チロちゃんの鼻を指で押して"ブタ"と言って遊んでいました。これをやると、チロちゃんは、いつも、"なんだよ！"というふうな顔つきで、私にとびかかってきて、これも、また、楽しかったです。それと、チロちゃんの前に手を差し出すと、よく甘がみをしてくれました。これは、気持ち良かったです。あと、チロちゃんの体を優しくかいて上げると、チロちゃんは、気持ちいいのか、足を動かしながら、笑った顔つきになるので、私は、その笑顔が好きでした。また、チロちゃんは、寝ている時、たまに、イビキをかいていたので、犬もイビキをかくのだと思った事や、寝ている時、時々、足を動かしていたので、犬も夢を見るのだと思った事を思い出します。

チロちゃんは、小さいころ、片方の耳が半分、折れて、たれていましたが、成長するに従って、耳が立っていきました。そして、チロちゃんは、成長が早かったので、首輪をすぐに、大きいサイズに、私が、交換したことを思い出します。私が、新しい首輪に、登録証などの複数のプレートを付け換えている時、オヤジから、これは、大事なものだから、なくならないように、しっかりと、取り付けるように、言われたことを思い出します。

最後に、チロちゃんは、好奇心旺盛で、夜中、家から、時々、逃げ出して、一晩中、遊び、明け方、家に帰ってきたと、オヤジが、チロちゃんが、生きていたころ、話していたことを、思い出します。